

編 集 後 記

日本に於ける泌尿器科の振興策としてはいろいろの事がある。例えば 大学に於ける講座の独立 大病院に於ける診療科の独立がある。従来のように皮膚科と共通であるとか 外科に従属するような形であつてはならぬ。独立してこそ斯学は発展するのである。古い考えや勝手な考えの持主も まだ残つてはいるが 一般の勢は独立に向つているのは喜ばしい事である。その他に極めて重要な事は 専門医制度である。ここにはそれに就て少しく述べてみよう。

専門医制度に就ては 数年前に 主に厚生省方面から唱えられたが その後 立ち消えになつていようである。その理由は よく判らぬが 各科によつて事情が異なる事 大学院及び学位制度との関係がどうなるかと云う事 基礎医学を志望する者が減少する恐れがある事 専門医と非専門医との健康保険に於ける報酬を如何にするかと云う事 等が考えられる。ここには泌尿器科から見た所に就て記してみよう。

昔は淋病患者が多かつたので これを診療する医者は泌尿器科の看板を掛けた。現在は淋疾は著しく減少しているが 習慣上 泌尿器科の看板を掛けている者は極めて多い。また医者であれば誰でも その看板を掛ける事が出来る。現在の泌尿器科は昔のそれと著しく異なり 高度の専門的設備 知識 技倆を必要とする。所が実際には膀胱鏡もレントゲンもないのに 泌尿器科の看板を掛けている。いかに習慣とは云え あきれた事である。これでは全く泌尿器科は馬鹿にされているようなもので 斯学の発達を阻害すること甚大である。この事を考えただけでも 泌尿器科を名乗る事を軽く考えてはならず それを名乗る以上は本当の専門医であらねばならぬ。本当の泌尿器科専門医はいかなるものか 大学院及び学位制度との関係をいかにすべきかと云う事を 泌尿器科学会に於て充分に検討すべきである。然しこの問題に就ては 厚生省 文部省 大学 学会の間に意見の相異があると考えられるので それを考慮せねばならぬ。尚 これは全科が一緒に行わねばならぬ事もなからう。泌尿器科だけで話を進めて行つてもよからう。麻酔科は既に麻酔医の制度を作つている。これを参考にするのもよい。皮科と泌科の両方の専門医を兼ねる事は不賛成であるが これに就ては改めて考えよう(昭和36年12月)



購 読 要 項

1. 発行は毎月(年12回)とする。年間購読者を以て会員とする。
2. 会員は年間料金 1,000円を前納する。1冊料金 100円。但し昭和37年度(第8巻)より年間購読料金1,200円、1冊料金120円と改正。払込みは振替口座番号京都4772番泌尿器科紀要編集部、或は第一銀行百万遍支店。
3. 入会申込みは氏名(フリガナ)、住所(雑誌郵送先)、勤務先、職地位、自宅開業の別、送金方法を御記入の上編集部宛。

投 稿 内 規

1. 原稿の種類は綜説、原著、臨床報告、その他。寄稿者は年間購読者に限る。
2. 原稿の長さは制限しないが簡潔にする。
3. 原稿は横書き、当用漢字、平仮名、新仮名使いを用い、片仮名には括弧を要しない。400字詰原稿用紙を用いること。附表、附図はなるべく欧文にすること。
4. 文献の書式は次の如くする。著者名：誌名、巻数：頁数、年次。
例。中野：泌尿紀要、1：110、昭30。Lazarus, J. A. : J. Urol., 45 : 527, 1941.
5. 300語以内の欧文抄録を記し、之には欧文の標題、所属機関名、ローマ字著者名を付け、なるべくタイプライターを用いること。希望の場合は当編集部にて翻訳します 抄録用の原稿を送ること。翻訳の実費は申受く
6. 掲載料は4頁迄毎頁 600円、それ以上の頁、アート頁、図表、写真は実費を申受ける。別冊20部を無料贈呈、それ以上は実費を徴収する。この場合には予め希望部数を申込むこと。特別掲載も考慮する。
7. 校正は初校のみ著者校正とし、再校以降は編集部が行う。
8. 原稿送り先は京都市左京区聖護院 京都大学病院 泌尿器科紀要編集部。